

鳩木節子の後日
甘木数彦

第五章

三

いつものように、仮くら井が暇な時間帯。節子と香奈の周りで、仮面にも床にも怠惰が降り積もる。商店会は一時の高揚から、元の落ち着いた雰囲気に戻っていた。ゆびぬき通りを覆っていた暗い影は消え、遠のきかけていた客足も回復していた。

「あのさ。ヒマなんだけど」

たるんだ声で香奈は言った。

「そうですね。お店がヒマっていうのはよくないですよ」

節子はノートパソコンから目も上げずに応えた。

「だから、そうじゃなくってさ。こういうときこそ、あんたの活躍を冒険活劇風に面白おかしく語るときなんじゃないの？」

キーボードを打つ手を止めて、節子は香奈を見た。

「すみません。上手く話をまとめるのって苦手なんです。報告書だっていつも伊助さんが最後に書き直してくれてましたし。そもそも、組織との戦いは喋ってはいけないことになっているんです」

「確かにね。ブログの方も少し長い話だと、いまいち要領を得ないときがあるし。その素人臭さがいいわけだけど。で、今はなに書いているの？」

香奈は立ち上がり、節子の傍らへ歩み寄ると、パソコンの画面を覗き込んだ。

「えーと『私の目の前で店長さんが退屈そうにしています。こういうとき、私が話し上手だったらいいんですけど。。。』って自分だけ可愛く思われようってまた。やらしーなー」

「違いますって」

「じゃあ、証明してよ。たとえば、そう。血みどろの半生を語るとか」

「だから、それは無理なんです。　　そういえば、香奈さんって私のことを自然に受け止めてますよね。普通なら変身して謎の組織と戦ってました、なんてそんなに信じるものなんでしょうか？　あ、伊助さんのことがあるから」

香奈は笑いだした。節子は不快そうな表情をわざと表に出す。

「今さらそんなこと言うなんて……」そこで再び香奈は笑いだした。「ごめんごめん。もっと信じられないことだってあるからね。伊助のことだって普通に信じたよ。こう見えてもほら、色々あったから」

「信じられない、こと？」節子は香奈を見据えたまま少し考え込み、やがて慎重に言葉を継いだ。「ひょっとして、汽一郎さんのこと……」

「うん？　あ、そう。そうなんだ？」

「香奈さん、知ってたんですか」

「まあ、でも、勝手に喋るのもちょっとね。驚いたでしょう？　汽一郎があんな」

節子はうなずく。

「やっぱり、忠晴さんや昭平さんが係わってるんですか？」

「いや、私もくわしく聞いたわけじゃないし。あんたはどうして知ったの？」

節子は化け猫と戦ったときのことを語った。

「なるほど。ここを守るために、か」

話を聞き終えた香奈は、感慨深げに呟いた。

「ええ。昭平さんもそんなことを言ってました。他に行き場がないから、ここがなくなったら困るって。香奈さんも？」

「そりゃあね。生まれ育った場所だから。それに、実は長いこと捜してる人がいてね、どうもその人がこの近くに住んでみたいで。だから、そういう意味でもここがなくなると困る」

「捜してる人」という言葉を香奈は何気なく使ったが、そのとき一瞬だけ、顔の筋肉が不自然に動いたのを節子は見逃さなかった。もの問いたげな節子の沈黙に気付き、香奈は軽く微笑んだ。

「大事な人なんだけど、もう長いこと会ってないからさ。ひょっとしたらもう会っているのかもしれないけれど、顔とか仕草じゃたぶん分からないと思う」

「じゃあ、その人は香奈さんのこと知らないんですね」

「たぶん、私が私だって気付いてないんだと思う。もし会ってたとしてもね」

その寂しげな口調に、節子はなんと応えればいいのか判らなかつた。

「汽一郎が不死身って、それはさすがに考えもしなかつたけどね」

香奈は重たい空気を打ち払うように、大げさな声を出した。節子は同意しかけて、嫌なことに思い至った。

「ひょっとして、香奈さん。汽一郎さんが不死身だってこと」

「ごめんね。知らなかつた。もっと別の秘密だと思ってて」

真顔だが、笑いそうになる頬を目元が抑え込んでいる。節子は香奈が、意図的に知っているような素振りをしていたのだと確信する。

「騙したんですね」

香奈は言葉に言葉を重ねて、それを否定する。それが余計に嘘くさい。

「それで、汽一郎が不死身だって話のどこに忠晴さんと昭平さんが出てくるわけ？」

節子を丸め込めないと悟ったのか、香奈は開き直って尋ねてきた。節子はもうどうでもいような気がして、汽一郎の部屋で聞かされたことを香奈へ伝えた。

「だからつまり、汽一郎さんが不死身になったことに、あの二人が係わっている可能性は高いんじゃないかと。あれ？　香奈、さん？」

香奈は節子話を聞いていなかった。考え事に没頭している様子だ。いつもの自信に満ちた雰囲気とは違い、指先を唇にあてがって考え込んでいる姿は神経質そうだった。

しばらくして、香奈は顔を上げると節子を見据えた。ひょっとしてまた一歩、厄介ごとに踏み込んでしまったのではないか。節子はそんなことを思いつつ、とりあえず愛想笑いを浮かべてみせた。

提供：ハムカツ屋

<http://www.hamkatsuya.com/>